

早稲田大学大学院日本語教育研究科

修士論文概要書

論文題目

日本語教育における「留学」の意味

—寮で生活する留学生へのインタビューから—

小山 いずみ

2014年3月

はじめに

本論文は、日本語教育においてなぜ留学生活に着目する必要があるのかという問いに関して、5章に渡って論じ、日本語教育における留学の意味とは何かを明らかにすることを目的としている。具体的には、留学生生活を構成する一つの場としての留学生寮に着目し、そこに居住する韓国人短期留学生ミジン(仮名、女性)の寮での生活体験に関するインタビューを基に、彼女にとっての寮生活の意味から留学の意味を考察し、留学の意味とは何かを再考しようとするものである。以下では、各章の内容を概観していく。

第1章 なぜ日本語教育において留学生活を見ていく必要があるのか

1章では、筆者自身がなぜ本研究を行おうと考えるようになったのか、その経緯を述べた上で、本研究の目的が示されている。筆者が本論文のテーマについて考えるようになったのは、筆者自身の留学経験と、留学生寮において Resident Assistant(以下、RA)として留学生と共に生活した経験による。筆者は2012年9月から2013年3月まで都内私立大学の留学生寮に居住していた。その中で始めに抱いた、日本人の友達ができない留学生が集団で暮らしている場という寮への印象が、本研究の協力者ミジンに出会い、彼女が寮での生活を通して生き生きしていく姿を見ることで、この場所、寮そしてここにいる人たちの存在は実は留学生活において非常に意味があるものなのではいかと考えるようになっていった。また、筆者自身の留学経験をふりかかると、留学生活とは言語習得などの目標を達成し、異文化を理解するような単純な機会ではなく、より複雑で、多様な経験を得る機会なのではないか、そしてその中でことばは学ばれていくのではないかと考えるようになった。こうした経験から、日本語教育においてこれまで捉えられてきた、学習リソースとしての留学生活や日本人とのネットワークの構築への偏重、そして日本語能力の向上をもって留学の成功/失敗を図ろうとする見方に疑問を抱くようになった。

留学生は日々、学校やアルバイト、サークルなど様々な場と人との関係の中で生活し、それらが絡み合っただけで留学生活が構成されている。そのため、本研究では特に住居を探すことが困難な短期留学生にとって重要な生活の場の一つである寮に焦点を当て、ミジンへのインタビューから、ミジンにとっての寮生活の意味とは何かを考察していく。その上で、留学の意

味とは何か、そしてなぜ日本語教育において留学生生活に着目し、留学の意味を捉え直していくことが必要なかを明らかにすることを目的とする。

第2章 留学生生活はどのように捉えられてきたか

続いて2章では、これまで留学生生活がどのように捉えられてきたのかを、異文化間教育・留学生教育と日本語教育の二分野から概観し、その問題点を指摘した上で、近年台頭してきた個々の留学生を対象とした研究を踏まえ、本研究の位置づけを示す。

異文化間教育や留学生教育の分野ではこれまで、大きく分けて①留学への期待と満足という観点から、日本人との対人関係構築の問題と、②適応を支援するネットワークとしてソーシャル・サポートの研究が多くなされてきた(横田・白土, 2004)。本文2.1.では多くの留学生が知識の獲得や日本語習得・日本文化理解を目的に留学する一方で、日本人との対人関係に困難を覚えていることが指摘され、それらの問題の解決へ向けた課題が議論される。また2.2.では、留学生が日本社会へ適応していくために、彼らがもつネットワークから得ている支援を把握しようとするソーシャル・サポート研究を取り上げた。そして、日本人だけでなく留学生のもつネットワーク全体からどのようなサポートを得ているかを考慮した点を評価しつつ、依然として国や地域別のネットワークから得られるサポートという固定的な見方があることを指摘した。その上で、これら(2.1., 2.2.)の研究はどちらも、留学生・日本人という境を前提に、その問題と解決方法を探ろうとするものであり、結果的に「言語」と「文化」を「本質化」し、留学生生活における重要な問題とされる「文化」の差異を越えられずにいることを論じた(三代, 2009, p.17)。

一方、日本語教育の分野では、留学生生活を日本語習得のための学習リソースとして捉え、日本人とのネットワークはその一つとして見なされてきた(片山・菅, 2010)。しかし、異文化間教育などと同様、日本人との関係構築が容易ではないことが指摘され、そのために日本語能力の向上や日本文化の理解などが強調されることで、日本人の日本語や、日本文化が「本質化」されてきた。それゆえ、日本人とのネットワークのみが注目され、本来留学生は日本での生活を通し日本語学習以外にも、様々な出来事や人との関係から豊かな経験をしているにも関わらず、留学生は日本語使用場面が豊富な環境におかれた日本語学習者として捉えられてきた。そして、学習を促進させる環境を整備することのみに焦点が当てられてきた。

そのため、日本語学習者ではなく、留学生として生活する日常生活の中で日本語がどのような意味をもつかは考慮されてこなかった。

こうした、日本人や日本文化の「本質化」と、留学生や留学生活に対する固定化した見方に対して、近年、個々の学習者に着目した研究が行なわれるようになってきている。その一つにライフストーリー研究がある。一人ひとりの留学生生活を丁寧に描くこれらの研究では、留学生活が日本社会への適応や、日本語習得というものに留まらず、自己実現や自分らしさといったアイデンティティの問題と関わる複雑な過程であることが指摘されるなど(中山, 2007 等)、従来の研究からの大きな転換を図るものである。しかし、これらの研究は自己実現や自分らしくいられることが、留学生活においてどのような意味をもつのかということへの言及はない。そこで、留学生活においてなぜ他者に対する自己を確立していくことが大切なのかという問いが必要なのではないかと考える。これが、本研究において留学生活から留学の意味を問う一つの目的である。

また、従来のコミュニケーション能力やインターアクションスキルを身につけることを目的とした日本語学習を問い直すものとして、状況論やコミュニティという観点から、留学生活の中でどのように日本語が位置づけられ、日本語を学ぶとはどういうことなのかを問う研究も増えてきている。その中でも本研究では、三代(2009a)が明らかにした、留学生活における日本語の学びとは、どこかに習得すべき日本語が存在しているわけではなく、他者と関わりコミュニティを形成していく過程と表裏一体をなすコミュニケーションの学びであるという立場を支持する。その上で三代(2009a)では研究対象ではなかった、日本人以外の留学生同士、あるいは集団の枠では表せない日常生活を送る上で大切な人との関係を含め、より根本的に、日本での留学生活は留学生にとってとはどのような体験か、留学生活の中で他者の存在とはどのような意味を持つかを探求する。そこで、留学生活を構成する場の一つである寮での生活体験に着目する。

第3章 なぜインタビューか

3章では、分析結果を示す前段階として、ミジンとはどのような人物であり、なぜ筆者がミジンに注目したのか、またそのためになぜインタビューを用いたのかを説明する。そして、いつどこでどのようにインタビューが行われ、どのように分析されたのを示した。ミジンは中学時代に通信教育で日本語を習い始め、その後韓国の大学の日本語学科に入学し、そこで3年半日本語を学んだ後日本へ留学した。また、留学の目的は日本語の発音を良くすること

であった。本研究では、日本語を上達させることを目標としていたミジンが、寮での生活を通し、変化していったことから、ミジンにとって寮という場が持つ意味、そして寮での生活が持つ意味を探ることを目的に全4回のインタビュー調査を行なった。また、分析に際しては、インタビューのスク립トを作成し、オープンなコーディングによりコードをつけた上で、内容的に類似性や関連性がありそうなものをまとめカテゴリーをつくっていった。その結果、8つのカテゴリーが生成された。これらのカテゴリーからさらに、カテゴリー間の関係を探っていく、次の二つのストーリーが見出せた。

- ・ 留学生活における寮の位置づけと意味の変化
- ・ 日本語の大切さの変化と日本人の友達に対する意識の変化

第4章 ミジンにとっての寮生活

4章では3章の分析から見えた二つのストーリーの記述、および、そこからミジンにとっての寮生活の意味を考察している。[4.1. ミジンの留学生活における寮の位置づけと意味の変化]では、ミジンにとって寮という場が、そこで暮らす人と知り合い、パーティーなどに参加しながら関係を変化させていく中で、次第に生活の中心となる大切な場になっていったこと、また入寮当初は、日本語を上達させるために日本人との出会いを求め、あまり興味がなかった寮の留学生たちが、寮で時間を共にし、「話す」中で生活を支える大切な人になっていった過程を描いていった。そしてその背景として、ミジンにとっての留学生活が日本語能力を向上させる機会であるだけでなく、初めての一人ぐらしという経験であったこと、そのためにいつも一緒にいられる「他の人」の存在が必要であったことを指摘した。

続いて[4.2. 日本語の大切さの変化と日本人の友達に対する意識の変化]では、韓国で日本語学科に所属するミジンにとって、将来のために大切な言語であった日本語が、寮で英語を話す留学生たちと出会い、コミュニケーションができないという「衝撃」を受けることでその大切さが変化していった過程を記述した。この「衝撃」から、ミジンは自分がなぜ日本語を学んできたのかを自問するようになる。そして、寮で韓国語を教えた経験などから新たな選択肢として韓国語の先生になることを考え始める。こうして自分にとっての日本語の大切さが変化したことで、日本人の友達へのこだわりもなくなっていった。ミジンにとって日本語がうまくなるとは依然としてネイティブスピーカーのようになることである。しかし、日本語学習は日本でなくとも、韓国にいても同じ授業を受けることに気がついた。それよりもミジンは今、寮の友達に囲まれて暮らす「贅沢な」生活を送っているのであった。

4.3. ではこれらの分析結果を踏まえ、ミジンにとっての寮生活の意味を考察した。ミジンにとって寮生活の意味とは、生活を支える人間関係とその大切な人たちと一緒に過ごせる空間・時間を共有しながら、自分と向き合うことで、今まで固執していた日本語から解放され新たな選択肢を見つけていくことであった。

第5章 「今・ここ」で生活する意味の探求過程としての留學生活

5章では、考察から得られたミジンにとっての寮生活の意味からさらに、留學の意味とは何かを議論した。その上で、日本語教育においてなぜ留學生活に注目していく必要があるのかを論じ、筆者がこれから日本語教育に携わる者として大切にしていきたいと考えることが記されている。留學生は日本語学習者である以前に、新たな地で他者と関わりながら、自分の生活を築いていこうとしている一個人である。そして、その中で様々な経験をし、自分にとって意味のある多くのものを得ながら生活している。留學の意味とは一人ひとりの留學生が見出していくここで生活する意味であり、それゆえ、個々の生活を見ることは各人の留學の意味を捉えることであり、ことばはその中に必然的に生まれ育まれていく。日本語教育において留學生活から日本語や日本人を取り出すのではなく、留學生活全体を視野に入れていくことはすなわち、留學生がここで生活する意味を知り、彼らが育むことばを知り、またその一部に位置づけられていくことであると考えられる。

このように考えるとき、日本語教育はこれまでのように留學を就職などの将来性や専門の勉強のための前段階の言語習得機会として位置づけるのではなく、そもそも留學の意味とは何かということを考えていくことが必要になる。そして、留學生の目的を達成させるために、どのような支援をすべきかということを中心に議論するのではなく、どのように留學生の生活に影響を与え、留學生一人ひとりが自分の道を見つけていけるような存在になり得るのかということを考えていく必要がある。

では、日本語教育はどのようにして個々の留學生活に影響を与えていくことが可能になるのだろうか。それは、教師自身が「日本語を教える先生」ではなく、目の前にいる学生であり、一人の人間である他者と向き合い、互いの背景を共有しながらことばを紡いでいく経験、そしてその経験が相手にとって今ここで生活していく意味を見出していけるような関係を築いていくことによってであると考えられる。筆者はこのようなことを胸に日本語教育に携わっていききたいと考える。

参考文献

- 片山智子・菅智穂(2010)「日本語初級学習者の接触場面に関する実態調査」『ポリグロシア』第19号, 立命館アジア太平洋研究センター, 79-89
- 中山亜紀子(2007)「韓国人留学生のライフストーリーから見た日本人学生との社会的ネットワークの特徴: 「自分らしさ」という視点から」『阪大日本語研究』第19号, 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座, 97-127
- 三代純平(2009a)「コミュニティへの参加の実感という日本語の学び —韓国人留学生のライフストーリー調査から—」『早稲田大学日本語教育学』第5-7号, 早稲田大学大学院日本語教育研究科, 1-14
- 三代純平(2009b)「留学生生活を支える日本語教育とその研究の課題—社会構成主義からの示唆」『言語文化教育研究』第8号(1), 言語文化教育研究所, 1-42
- 横田雅弘・白土悟(2004)『留学生アドバイジング 学習・生活・心理をいかに支援するか』ナカニシヤ出版